イタリア・トスカーナ地方の世界遺産
『オルチア渓谷』と『シエナの歴史地区』
～ルネサンス美術への系譜を辿る～

『オルチア渓谷』

『シエナの歴史地区』

『オルチア渓谷(けいこく)』はイタリア中北部・トスカーナ州のシエナ県に在り、フィレンツェから 80～90 kmほど南下した周辺一帯のことを指します。オルチアは「渓谷」といっても、一般的にイメージされる深い谷間の峡谷ではなく、オルチア川が流れる風光明媚(ふうこうめいび)でなだらかな丘陵地帯です。

今回は、トスカーナ地方の世界遺産『オルチア渓谷』と『シエナの歴史地区』について、ルネサンス期以前の絵画の歴史とともにご案内します。

オルチア渓谷は美しい自然美が特徴的ですが、自然遺産ではなく、文化遺産です。というのも、この土地で自然に育まれた渓谷ではなく、実は 13 世紀頃から数百年かけて、シエナの人々によって開墾された土地なのです。「*ルネサンス期の理想的な農村風景、人々が自然と調和して暮らすオルチアの風景はシエナ派の画家などルネサンス期の芸術家たちにも大きな影響を与えた*――『すべてがわかる世界遺産大事典（下)』」。つまり、人間が自然と共に作り上げた景観＝文化的景観の概念が適用されています。また、オルチア渓谷の一般的なイメージは「糸杉(いとすぎ)」の連なるなだらかな風景ですが、この糸杉は植林されたものです。

この、オルチア渓谷から大きな影響を受けたルネサンス期の芸術家たちについて、私なりの解釈を申し上げますと、まず広大な土地に 13 世紀頃から開墾(かいこん)が開始されたので、それが美しい風景に変貌(へんぼう)するのは 14 世紀以降だと考えられます。レオナルド・ダ・ヴィンチの 20 歳頃の作品『受胎(じゅたい)告知（1472 年頃～1475 年頃)』をご覧いただくと、なんと、背景に「糸杉」らしき木が描かれています。この作品は、実景を描いたものではなく、人物や建物、背景など、想像したもののパーツを組み合わせて、１枚の絵になっています。様々に思い浮かぶイメージの中で、画家は“糸杉のある風景”を選択しました。トスカーナ地方のヴィンチ村で育ったレオナルド少年にとって、この“糸杉のある風景”は心に焼き付くものだったのでしょう。遠く故郷を離れてフィレンツェの工房で描かれた『受胎告知』には、オルチア渓谷の影響を受けた少年期のレオナルドの姿が、垣間見(かいまみ)えてきます。

レオナルド・ダ・ヴィンチ『受胎告知』

オルチア渓谷を訪れると、空間の広がりを感じます。高い山も無く、なだらかな丘陵地帯が続き、視界が遮(さえぎ)られることもなく、遠くまで見渡せる風景です。レオナルド・ダ・ヴィンチの独自の空間表現や遠近法は、この空間の広がりからインスピレーションを得たものだと思います。シエナ派の画家たちにとっても、シエナの街から遠くないオルチア渓谷は魅力的な場所だったのでしょう。15 世紀になると、自然を背景に描く作品が徐々に増えてきます。

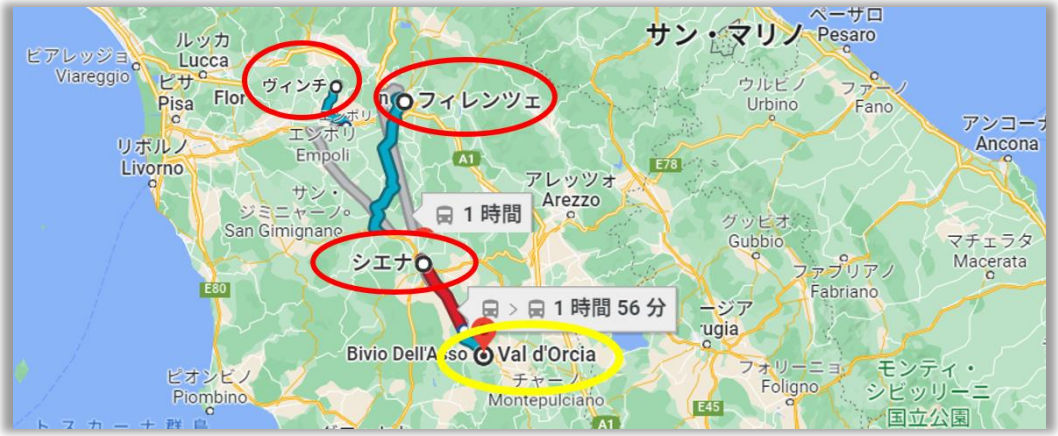
トスカーナ州のシエナ県には、世界遺産が３件あります。『オルチア渓谷／登録 2004 年、登録基準（ⅳ）（ⅵ）』、『シエナの歴史地区／登録 1995 年、登録基準（ⅰ）（ⅱ）（ⅳ）』、『ピエンツァの歴史地区／登録 1996 年、登録基準（ⅰ）（ⅱ）（ⅳ）』です。特に、『ピエンツァの歴史地区』は、『オルチア渓谷』の中に在ります。

『ピエンツァの歴史地区』

ピエンツァのグローサリーショップ

シエナへはローマやフィレンツェから列車で行くことができますが、オルチア渓谷とピエンツァへは個人では周りにくいので、フィレンツェからのオプショナルツアーに参加されることをお勧めします。オルチア渓谷はトスカーナ・ワインの生産地で、チーズや畜産物などの名品で知られています。ピエンツァは 15 世紀に再開発された計画都市で、街づくりに初めてルネサンス様式が取り入れられましたが、アグリツーリズムにも力を入れており、土地の食材を活かした料理を堪能したり、農家に民泊したりすることもできます。このトスカーナ州シエナ県の中心都市がシエナです。シエナは 12 世紀中頃からトスカーナ地方の金融都市として発展し

始め、14 世紀から 15 世紀にかけて最盛期を迎え、同じくトスカーナ州のフィレンツェと地域の覇権をめぐる争いが絶えませんでした。しかし、ペストの大流行などにより弱体化し、16 世紀にはフィレンツェに併合され、その歴史に幕を閉じます。



絵画の世界でも、この２都市は競い合っていて、フィレンツェではチマブーエ（1240 年頃～1302 年頃）やジョット・ディ・ボンドーネ（1267 年頃～1337 年頃）など、シエナではドゥッチョ・ディ・ブオニンセーニャ（1250 年代半ば以降～1319 年頃）やシモーネ・マルティーニ（1280 年代半ば～1344 年頃）などが活躍していました。イタリア・ルネサンス期以前の画家として、この４人はぜひ押さえておきたい、とても重要な画家です。彼らが活躍したのは、フィレンツェでルネサンスが開花する約 200 年前のことです。それぞれ「フィレンツェ派」、「シエナ派」と呼ばれることがあります。それぞれの絵画の特徴としては、フィレンツェ派は絵画の新しいスタイルを吸収し変化していくのに対して、シエナ派の画家は伝統を守り、作風もどことなく神秘的です。また、４人の代表作には共通している部分がありますので、比較してみてください。

＜フィレンツェ派＞

① チマブーエ作『荘厳の聖母』拡大図 1280 年頃（パリ・ルーブル美術館蔵）

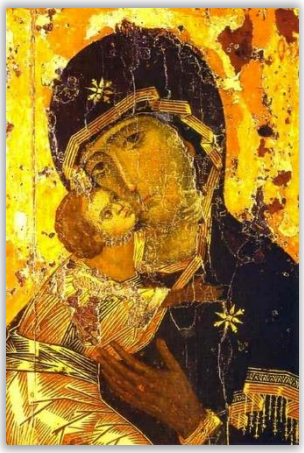
② ジョット作『オンニサンティの聖母』拡大図 1310 年頃（フィレンツェ・ウフィッツィ美術館蔵）

＜シエナ派＞

③ ドゥッチョ作『マエスタ（荘厳の聖母）』拡大図 1310 年頃（シエナ大聖堂付属美術館蔵）

④ マルティーニ作『マエスタ（荘厳の聖母）』拡大図 1315 年頃（シエナ市庁舎蔵）

４作品とも「聖母子像（聖母マリアと幼児イエス・キリスト）」を描いたもので、“首を傾げた聖母の姿”はとてもインパクトがあります。このポーズ、どこかで観たことがあるという方もいらっしゃるのではないでしょうか。13～14 世紀に多くの画家が取り入れ、描かれました。ルネサンス期以前の「聖母子像」をイメージ付けけた作風と言えるでしょう。歴史を簡単に振り返りますと、時代を遡ること 395 年にローマ帝国が東ローマ帝国（その後、約 1,000 年続く）と西ローマ帝国（その後、約 100 年後に滅亡）に分離しました。コンスタンティノープル（現在のトルコ・イスタンブール）に首都を置く東ローマ帝国では、地理的にギリシャに近いこともあり、正教会（ギリシャ正教）が広がりを見せ、絵画では正教会の絵画であるイコン（宗教画）やモザイク壁画が全盛を迎えました。これらの絵画は「ビザンティン美術」と呼ばれ、その作風は約 1,000 年を経ても維持され続けました。



『ウラジーミルの生神女』

つまり、この“首を傾げた聖母の姿”は、ビザンティン美術の影響、東ローマ帝国から伝播したものと考えられます。ビザンティン美術の代表作、12～13 世紀頃に描かれたイコン『ウラジーミルの生神女』拡大図（モスクワ・トレチャコフ美術館蔵）をご覧いただくと、向きは反対ですが、ほぼ同じ作風です。

チマブーエ

ジョット・ディ・ボンドーネ

ドゥッチョ・ディ・ブオニンセーニャ

シモーネ・マルティーニ

フィレンツェ派とシエナ派の画家たちは、お互いに影響し合いながら時代を切り開いていきますが、後のルネサンスの画家たちはフィレンツェ派の系譜になります。フィレンツェ派の画家を紹介しますと、まず、チマブーエはヨーロッパで誕生した最初の著名な画家のひとりです。チマブーエが活躍した時代はゴシック美術の時代（12 世紀頃～15 世紀頃）で、それ以前のロマネスクの時代（10 世紀末～12 世紀頃）は、作家が誰であるかは、さほど重要ではありませんでした。いずれの時代も建築が盛んで、絵画は作者不明の宗教画などが殆どでした。一般的に西ローマ帝国が滅亡した 476 年以降から、東ローマ帝国が滅亡した 1453 年頃までを「中世」と呼びますが、ゴシック美術の時代は中世の後半にあたります。ゴシック時代の絵画は、過去の絵画様式にビザンティン様式を取り入れ、人間味を持たせたもの。そこからルネサンス絵画に繋がる変遷を辿ると、13 世紀後半にビザンティン様式の絵画を取り入れたチマブーエから始まり、ジオットに継承され、「背景が金色で平面的なビザンティン様式の作風」から徐々に「人間的、空間のある作風」へと変化し始め、その絵画技法は後のルネサンスの画家たちに大きな影響を与えることとなります。15 世紀に入ると、マザッチョ（1401 年頃～1428 年頃）が遠近法や豊かな感情表現のある作品を遺し、修道士でもある画家フラ・アンジェリコ（1390 年代前半～1455 年頃）やフィリッポ・リッピ（1406 年頃～1469 年頃）が人間味のある多くの祭壇画の傑作を

遺します。そして、フィリッポ・リッピの弟子、サンドロ・ボッティチェリ（1445 年～1510 年）へと受け継がれ、ルネサンス美術が一気に開花します。画家チマブーエの登場からルネサンスまでの変遷を駆け足で辿ると、このような流れになります。

『シエナの歴史地区』は、カンポ広場を中心に広がっています。カンポ広場はすり鉢状になっていて、扇の要に向かって緩やかに傾斜しています。実際に歩いてみると、はっきりと傾斜を感じられます。見た目よりも急で、走ると前のめりに……。他の街にはない、独特の広場です。この広場には落ち着いたカフェやレストランが建ち並び、眺めも良く、一息つくには最適の場所です。そのカンポ広場の裏手に在るのが、シエナ大聖堂付属美術館で、シエナ市庁舎はこのカンポ広場に面しています。シエナ大聖堂付属美術館にはドゥッチョの代表作『マエスタ』が、シエナ市庁舎にはマルティーニの代表作、同じく『マエスタ』が展示されています。シエナには、このふたりの画家の作品が多くあり、街の歴史を語る上でも、どれほど街の芸術的・文化的発展に貢献していたのかが分かります。もしシエナを訪れたなら、じっくりと鑑賞してください。

カンポ広場

オルチア渓谷

イタリアを旅すると、ローマ、フィレンツェ、ミラノ、ヴェネチアなどの人気の観光都市の歴史や美術を中心に触れることが多いと思います。しかし、イタリアでは、それ以外の都市や街も世界遺産に数多く登録されていて、その都市や街の歴史を紐解いていくと、街の形成や美術との繋がりについて、より深く学ぶことができます。そして、必ずと言って良いほど、ゆかりのある画家とその作品が登場します。美術をテーマに歴史を多角的に楽しめるのも世界遺産を学ぶ魅力の一つだと思います。

沼田政弘